

文化・芸術の地としてまちづくりを推進する ～奈良県宇陀市室生区（旧奈良県宇陀郡室生村）～

奈良県宇陀市室生区（旧宇陀郡室生村）は大和平野の東部に位置する南北 17km、東西 12km、面積約 108km²の山村地域。区の面積の約 80%は山林で占められ、宅地はわずか 0.8%にすぎない。また、全地域の約 27%が室生赤目青山国定公園に指定されており、女人高野として世界的に有名な室生寺をはじめ多くの史跡、国宝・重文級の文化財が点在している。そのため、古くから密教などの信仰の聖地として多くの人々から親しまれ、その精神性もあって、近年は都市から多くの芸術家を惹きつける地として、これまで多くの芸術家が来訪または移り住み、室生のまちづくりに大きくかかわっている。

※宇陀市は、2006年1月、宇陀郡の大宇陀町、菟田野町、榛原町、室生村の3町1村が合併して誕生。

「アートアルカディア計画」

宇陀市室生区は、室生村当時、「文化・芸術の村」を標榜していた。自然と人間の結び付きをもう一度考え、人が自然と共生するためには、文化・芸術が大きな役割を担うことから、新しい世紀にふさわしいまちづくりのビジョンとして、豊かな自然に恵まれた現代の理想郷（アルカディア）をめざした「アートアルカディア計画」を1997年に策定し、国土庁（当時）の支援を得て、芸術・文化の視点からまちづくりに取り組んできた。

「アートアルカディア計画」は、村全体が美術館、博物館となるフィールドミュージアムをイメージしており、美しい景観を保全・創出することが、観光の活性化や交流人口の増大につながるとの考えから、地域内の各所に新しい地域資源を創り出している。またこれらの各施設が、相互に連携かつ補完しあうことでの相乗効果も期待されていた。



「アートアルカディア計画」で最初のシンボルとなった「道の駅のモニュメント」

「アートアルカディア計画」の基本コンセプト

①景観の保全、活用

- ・歴史文化遺産や優れた室生ならではの原風景を再発見し、美しい景観の保全と文化芸術活動によって創造性を導き出す。
- ・村全体をフィールドミュージアムとして、絵になる風景を作り出していく。

②公共事業とアートの融合

- ・生活基盤の整備に合わせて文化基盤を同時に作り出していく。（環境整備計画）
- ・道路、橋、トンネル等をアートの視点から風景との統一感に考慮し、美しい親しみやすいものにする。
- ・生活基盤のヒューマンスケール化をすすめる。

③住民主体の文化芸術活動

- ・住民が文化・芸術に身近にふれる機会を提供し、文化運動にその輪を広げる。
- ・伝統工芸（藍染、草木染、木工細工）とアートによる産業化をすすめ、オリジナル商品開発や間伐材を利用した商品開発を行う。
- ・民家を利用した文化交流、発信の場づくりをすすめる。

以下に、「アートアルカディア計画」により実施された主な事業等について紹介する。

【室生山上公園芸術の森】

室生山上公園芸術の森は、「アートアルカディア計画」のシンボル事業として2001年度より整備を進めてきたもので、地すべり対策後の跡地を

活用し、公共事業と芸術を融合させた、これまでに類のない施設である。

山上公園の整備構想は1995年に持ち上がり、室生出身の彫刻家井上武吉氏（1930～1997）に、道の駅とそこに設置するモニュメントのデザインを依頼。井上氏は1997年、村の風景を再発見させ、村全体を人間と自然が共生する美術館とする構想「森の回廊計画」をまとめた。村は森の回廊計画を礎に、独自の地域づくりを行う「アートアルカディア計画」を制定。しかし、井上氏が計画の途中で急逝したため、氏の古くからの友人であるダニ・カラヴァン氏が「アートアルカディア計画」のシンボルとして、山上公園全体がモニュメントとなるよう設計した。完成は2006年6月。



周りの木々と見事に調和する施設棟



第一湖のモニュメント

室生山上公園芸術の森は、公園全体が芸術作品であり、自然とアートが一つに溶け合った風景彫刻として、将来の文化遺産を目指している。また、「自然をつかって第2の自然をつくる」ことをコンセプトに、昔の生活の足跡、棚田や森といった要素をできる限り残し、人々にとって懐かしい原風景を象徴的に表現している。

当初から「アートアルカディア計画」に関わっ

てきた宇陀市総務部企画課主幹、松岡保彦氏は、「いわば第2の室生寺として、数百年の歳月にも色あせないような公園にしていきたい」と意気込んでいる。

【住所】 宇陀市室生区室生 181 番地

【電話】 0745-93-4730

【開園時間】 4月～10月：10:00～17:00

3月、11月、12月：10:00～16:00

【休園日】 毎週火曜日および12月29日～2月末日

【ふるさと元気村】

ふるさと元気村は2007年4月15日に開村。地域の環境や特性を活かし「文化・芸術」をテーマに、自然体験や文化活動を通じた交流活動によって、地域や地域に住む人々が元気になってほしいとの思いから、地域振興を目的に廃校となった小学校をリニューアル整備したものである。

この施設では、芸術家に、一定期間滞在しながら創作活動ができるアトリエを提供し、創作された作品はギャラリーとして展示している。また、地域の食材を活用した「もてなし」や芸術家による教室も開かれ、来訪者との交流活動を大切にしている。



ふるさと元気村の外観

中心人物の江本幸雄氏は、室生の魅力に惹かれ移り住んだひとり。もともと大阪府南部に住んでいたが、趣味の街道歩きの際に室生で偶然見つけた築100年以上の廃屋が気に入りと、別荘として購入した。そして、自身で井戸を掘るなど暇を見つけては住めるよう少しずつ手を加えていった。

そんなある日、室生村の過疎化が進展し、この

ままでは小学校が「複式学級（複数の学年を1クラスにまとめる）」になってしまうという窮状を知り転居を決断。家族の理解もあり移り住んだのが18年前のこと。「転入当初は、村のならわしや地域活動など、都会との慣習の違いにとまどったが、最近やっと地域に受け入れてもらえるようになった」と当時を振り返る。

しかし、残念ながら少子化の波には勝てず、2002年に地区にある田口小学校の廃校が決定した。決定を受けた地域住民は小学校を活用する委員会「田口小学校跡活用委員会」を立ち上げ、いろいろと意見交換や議論が行われた。著名な切り絵作家でもある江本氏を含めた委員会での提案は、室生村が今まで進めてきたことを活かし、芸術・文化でまちづくりを進めていこうというものであった。

「文化・芸術」のコンセプトにモデル性があるとの理由から、国からの補助金支給が決定。そして、宇陀市の跡地活用の第1号として、拠点となるふるさと元気村が開校したのが1年前のこと。

現在、ふるさと元気村は指定管理者制度によって「田口小学校跡活用委員会」が運営しており、地元の人からはボランティアとして労力の提供を、室生地域外に住む地域出身者からは金銭面での援助を受け運営されている。

もうけ主義に走るのではなく、『『体験から体感へ』、そんなことができる地域づくりに取り組んでいきたい。そして、（他地域の人は）室生に住みたくなる、（室生出身者は）室生に戻ってきたい、そういった環境をこれからは作ってきたいと江本氏は今後の抱負を語っている。

〔住所〕 宇陀市室生区下田口 1112
 〔電話〕 0745-93-4400
 〔開館時間〕 9:00～22:00
 〔休館日〕 木曜日（宿泊を伴う場合を除く）



芸術家による教室のひとつ「江本幸雄氏の切り絵教室」

【音楽の森 ふれあい館】

音楽と食をテーマに、まちと村の世代間・地域間の交流を行うことを目的に、廃止された笠間保育所を「音楽の森 ふれあい館」としてリニューアル整備したもので、開館は2005年秋。「アートアルカディア計画」のソフト事業に位置づけ、音楽を通して、「地域の活性化や高齢者の社会参加促進」、「子ども達のふるさとを想う心を育む」といったことを目的とし、地域の活性化も目指している。

同館では「昼下がりコンサート」（毎週水、木、金、土曜日）や「森の音楽喫茶」（原則毎月第2土曜日）を定期的に開催している。コンサート開催時には、地元食材を使った朝食やお菓子でのもてなしも行われている。また、幅広い年代層の「音楽の森むろうコーラス」と小中学生を対象とした「室生どんぐり児童合唱団」のコーラス活動も行われている。

〔住所〕 宇陀市室生区上笠間 444-1
 〔電話〕 0745-97-2215
 〔開館時間〕 11:00～16:00
 〔休館日〕 日・月・火曜日（年末年始）



「音楽の森 ふれあい館」の外観

その他

【「アートアルカディア計画」による公共施設】

先に紹介した道の駅や山の上のモニュメント以外にも、道路、橋、トンネルといった生活基盤の中に「アートアルカディア計画」による公共施設があり、地域内 10 か所に点在している。

1. やまなみドーム
2. 「アートアルカディア計画」推進モニュメント
3. 道の駅モニュメント
4. 広域農道の親柱
5. 滝谷大橋親柱
6. 駅前スロープ
7. 落石防止擁壁化粧仕上げ
8. 広域農道橋色彩デザイン
9. 弘法の井戸
10. 山の上のモニュメント



1. やまなみドーム



7. 落石防止擁壁化粧仕上げ

【室生 20 景】

住民参加のソフト事業として、美しい絵になる風景を後世に伝えようと、「室生 20 景」を村民（当時）から募集のうえ選定。そして、20 景を再発見・再評価するフォトツーリズムをはじめ、野外ギャラリーの開催など、地域の持つ歴史文化風土に触れ親しんでもらうことから地域の魅力を再発見してもらう地域間交流事業が行なわれた。

前掲「道の駅モニュメント」も室生 20 景のひとつに数えられる。



室生20景：室生ダム湖



室生20景：
伊勢本街道と旧旅籠

【奈良のむらづくり協議会（工房街道ウィーク）】

奈良県の中部・東部地域である、室生から吉野郡川上村にかけての「日本のふるさと」的な景観・雰囲気が残る街道沿いに、紙漉きなどの伝統的な工房や、陶芸・木工などのデザイナーや芸術家が数多く居住し、生活空間を演出する様々な工房が存在している。

「奈良のむらづくり協議会（代表 村田武一郎 奈良県立大学教授）」は、こうした工房を訪ねるツアー「ふるさと元気村 山の芸術学校体感プラン」を企画。昨年夏に行われ、東京、大阪などから 20 組以上の親子連れが参加した。

本ツアーは、「歴史文化遺産に組み込まれた奥深い自然の魅力の体験」をすることができる。たとえば、地元の食材を使った自炊、夜間の昆虫探し、星の観察や早朝散歩など、元々自然にあるものを活かした新しい発見ができる企画を満載している。「都会では味わえない貴重な体験ができた」と参加者の満足度は非常に高い。

【おわりに】

旧室生村時代に策定された「アートアルカディア計画」は過疎対策の意味合いがあった。現在、同計画により完成した数々の施設には奈良県はもとより大阪や名古屋、そして遠く関東地方からも観光客が訪れ、その数も徐々に増えてきているという。

今後、増加する観光客、そしてそれを受け入れる側の人々、さらに地域住民や室生出身者などといった「人」の動きが活力となり、まちづくりの進展や地域の活性化を後押ししていくものと期待される。
(丸尾、井阪)